

日中国交秘話 中南海の一夜

二階堂 進

日中国交回復から二十年、その間、多少のさざ波が立つことはあったものの、日中両国の友好親善関係は希望に満ちた将来に向けて、ますますその広がりや深さを増し、いまや日本と中国は互いになくてはならない国となっている。しかし、こうした友好親善関係の高まりのなかで、とかく忘れられがちなのはその礎を築くため力を尽くした人びとの努力である。

中国には「水を飲むときには井戸を掘った人びとのことを考えよ」ということわざがあるが、清らかな水が湧き出るまでに、井戸を掘った人びとが泥まみれ汗まみれの苦勞をしたことを、ときにはつるはしが先が折れるような固い岩盤にぶつかったことを思いだして、感謝の念を深めなければならぬ。

振り返ってみると、この二十年のあいだに日中共に井戸を掘った多くの人びとが去っていった。日中国交正常化交渉の最中に北京の中南海で行われた歴史的な会谈の参加者について見ても、日本側では大平さんが亡くなり、田中さんもあんなことになった。

中国側では毛沢東さんも周恩来さんも、さらに私のカウンターパートだった廖承志さんも亡くなった。

あの会谈には外務省の人が立ち会っていなかったから、中国側の通訳を除けば、その場のことを語るのは私だけということになってしまった。私は中国問題についてとくに論ずる資格があるわけではないが、あの場の残された唯一の証言者という立場から、求められるままに当時のことを述べてみたい。

慎重だった佐藤さん

日中国交正常化を可能にしたこの会談にこぎつけるまでには、田中さんの勇氣に満ちた決断と大平さんの実に緻密な配慮があった。まず、そのことを述べておかなければならない。

日中国交正常化の動きが盛んになってきたのは、何といつても、中国をめぐる国際情勢が大きく変わってきたからである。それまでも多くの人びとが中国との関係を改善しようとさまざまな努力を重ねてこられたが、冷戦下の東西対立は厳しかったし、また、日本が戦後に台湾（中華民国）と日華条約を結んでいたという事情もあって、日中関係はなかなか発展の軌道に乗らなかつた。

ところが、昭和四十五年（一九七〇年）の国連総会の本会議で中国の国連加盟招請・台湾の追放決議案がはじめて過半数を占めるという状況になった。国連加盟には総会本会議の三分の二の賛成を要するので、これがただちに中国の国連加盟を意味するものではなかつたが、第三世界に属する国々の支持の強まりによって、中国の国連加盟はもはや時間の問題と考えられるようになった。こういふ背景のもとで、この年の暮れ、自民党の藤山愛一郎氏を会長とする超党派の日中国交回復促進議員連盟が結成され、日本政界にも国交正常化をめざすいろいろな動きがはじまった。

そのなかで、はつきりしてきたのは、北京政府が代表する中国と国交を正常化するには、どうしても台湾問題をきちんと処理しなければならないということだった。しかし、自民党の有力者のなかの、岸（信介）さんや賀屋（興宣）さんや石井（光次郎）さんや灘尾（弘吉）さんなど、親台派と呼ばれる人びとは、古くから国府の指導者とも親交があり、蒋介石総統が日本に賠償を求めずに日華平和条約を結んでくれたことを大いに多とじていたから、そのような台湾に不義理をすることはできないと、北京政府の承認に強く反対した。

私がお仕えしていた当時の佐藤首相も、対中政策を再検討する必要があるとは考えておられたものの、心情的には親台派に同調しておられ、私が会いに行くと、正常化促進派の動きに対していつも「まだ早い」とか「台湾をどうするのだ」と不満を述べられた。

しかし、翌昭和四十六年に入ると、国交回復促進の勢いはいつそう激しくなり、中国側もピンポン代表団を送り込んでくるなど、新たな動きを見せはじめた。日本が受けた最も大きな衝撃は同年七月十五日にアメリカ政府がニクソン大統領の訪中決定を発表したことだった。日本では「頭越し外交」などと言って、アメリカの行為を非難する声が高まったが、実はこれは、世界の対立構造に大きな変化が生じたことの決定的な証拠だった。かつては社会主義の一枚岩と言われていた中ソ関係が、すでに何回か国境で武力紛争を起すほど悪化していた。

また、ベトナム戦争に疲れたアメリカが、ソ連に対抗するためにそのアジア政策を転換しなければならなくなっていた。また、中国自体にも、五年前からはじまった文化大革命ですっかり疲弊し、アメリカや日本など西側の協力を必要とするという事情が生じていた。

こういう情勢のなかで、前尾（繁三郎）さんのあとを受けて宏池会の会長になった大平さんは、秋の議員研修会における提言で、日本が国連における中国反対の政策を改めて、国交を正常化すべきであるとの方針を打ち出した。これは明らかに当時の佐藤政権に対する反対の態度だったが、大平さんは、昭和三十九年の池田内閣の外相時代に、衆議院外務委員会で野党から北京政府承認について聞かれたとき、「中共政府が世界の祝福のなかで国連に加盟するという事態が起れば、わが国としても国交正常化を考える」という意味のことを答えていたから、この時点でそういう方針を打ち出しても不思議ではなかった。

しかし、佐藤派に属していた田中さんや私たちにとっては、佐藤首相の権威は絶大だったし、佐藤派内には強い親台派も存在していたから、まだ日中国交正常化を現実の日程として考えるような状態ではなかった。

「あいさつ一つできないようでは困る」

だが、日中国交正常化を求める動きはさらに強まった。この年十月二日、先の日中国交回復促進議員連盟の代表が訪中し、王国権さんを団長とする中日友好協会代表団とのあいだで日中国交回復に関するいわゆる「復交四原則」が発表された。その内容は、中華人民共和国が中国人民を代表する唯一の合法政府である、台湾省を中華人民共和国の領土の一部と認める、いわゆる「日台条約」は不法かつ無効なものなので廃棄されるべきである、国連のすべての機構から国府代表を追放すべきである、というものだった。

そして、この声明後まもなくの十月二十五日、国連では、いわゆる「アルバニア決議案」が通って、中国の国連加盟が認められた。日本政府は、アメリカなどと組んで、中国招請反対にまわったので、正常化促進派からはその不明を責められた。こうして中国問題は、自民党の中を二分する問題となった。また、復交四原則のうち第一項が実現されてしまったので、以後、それは「復交三原則」と呼ばれ、その後の日中間の正常化論議のベースとなった。

そうこうしているうち、佐藤さんが政治生命をかけて取り組んだ沖縄返還が実現して、佐藤さんの退陣の時期が次第に絞られてきた。佐藤支持陣営では、福田（赳夫）さんと田中さんが次の総裁公選に立候補するものと見られ、私たち田中さんを支持する者たちの動きも次第に活発になった。私は、佐藤派内を中心に同調者を求めて、「佐藤さんのあとは田中でいきましよう」と懸命に説得工作に動いたが、総裁選挙に出るには政権構想が必要である。田中さんはすでに「日本列島改造論」を明らかにしており、私はこの政策化を急ぐべくスタッフを督励していたが、田中派としての外交上の路線はまだ明確になっていなかったと思う。

大平さんにしても、日中国交正常化の方針は打ち出していたものの、具体的にどうするかについては、なお慎重な態度だった。総裁選挙で多数をとるためには、党内の親台派を早くから刺激するのは、得策とは言えなかったのだ。

田中さんと大平さんは人も知る盟友だったから、この重要な問題についてはおそろく何度も話し合っていたことだろう。あとで知ったことだが、大平さんの古くからの親友であり、中国側の要人と懇意だった自民党の古井（喜実）さんは、すでに五月のはじめの訪中に当たって、田中さんと大平さんの求めに応じて訪中し、周首相はじめ中国の対日関係の責任者と会って、田中・大平政権ができれば日中国交正常化は急速に進められるだろうと語っていたという。私は、そのへんについては詳しく知らなかったが、このころから田中さんが、「中国は隣国だ。中国の人とすれちがっても、あいさつ一つできないようなことでは困るんだ。『おい』と言って肩の一つでも叩けるような関係にならんとな」と言いだしたことを記憶している。だが、まだ田中・大平は、表向きは正常化に慎重な姿勢を示していた。そうしたなかで、同じく総裁候補と目されており、周首相とも面識のある三木（武夫）さんだけは、日中国交正常化を声高く、主張していた。

佐藤さんの花道である沖縄返還式典の五月十五日が過ぎると、田中さんと福田さんが立つことがはっきりし、大平さんと三木さんの立候補も確実と見られた。六月十七日、佐藤さんが退陣表明を行ったのを機に、各派はポスト佐藤の総裁公選に向けて一斉に走りだし、投票日が近づくとつれて、多数派工作が盛んになった。去就が目された中曾根さんは、この時点で田中さんを支持することを明らかにした。投票日五日前の七月二日、田中・大平・三木の三派が反福田連合を結成したが、日中国交正常化はそのとき結ばれた政策協定の中心的な柱となり、その後誕生する田中内閣の最も重要な外交政策の位置を占めることになった。

大平さんの周到さ

昭和四十七年七月七日、田中内閣が誕生した。大平さんが外相に、私が官房長官になった。宏池会には、大平さんが幹事長になるべきだという意見もあったようだが、すでに田中・大平のあいだには、「内政は田中・外交は大平」という話ができていたようだ。

大平外相は初閣議後の記者会見で、日本と台湾との関係に触れて、「田中内閣の最大の課題は日中国交正常化である。日中国交正常化が完結する状態になったときには、日台条約が存在するとは考えられない」と言明した。日本政府首脳のこの発言は北京から好感をもって迎えられ、周恩来首相はすぐに、「田中内閣が国交正常化の意向を表明したことを歓迎する」という談話を発表した。

私はこれに添えて、「日本政府の日中国交正常化に寄せる熱意が中国側に十分理解されたことは結構なことである。政府としては、いまや日中政府間の接触の機が熟しつつあると考える。したがって、今後は政府の責任において、日中国交正常化のため具体策を着実に進めていく考えである」という官房長官談話を発表した。

国交正常化の機運は一挙に盛り上がったが、各方面からいろいろの意見が出てきたので、七月十八日、田中内閣は、野党からの質問主意書に対する答弁書というかたちで、「日中国交正常化に対する基本姿勢」を次のようなかたちにとりまとめた。「戦前戦中の一時期、わが国が中国人民に多大の迷惑をかけたことについては、謙虚に反省すべきだと考える。中華人民共和国が提示した、国交正常化に関する『復交三原則』については、基本認識としては政府としてこれを十分理解できる。中華人民共和国が中国を代表する唯一の正統政府であることを認めるという前提で政府間の交渉に臨む考えである」

日中国交正常化の推進を一身に背負った大平外相の手の打ち方は周到をきわめていた。まず、大平さん

は中国側の考えを質すのに、古井さんなどの身近な人びとだけでなく、正常化に強い関心を持つ野党にもその役割を分担してもらった。社会党は、復交三原則を認めるならば支援すると表明していたし、公明党は、田中首相が日中打開への決意を持てば協力を惜しまないと言っていたのだ。大平さんは、まず、七月十二日の佐々木（更三）元社会党委員長の訪中に際して、田中首相の真意を伝えてもらうよう依頼した。

私は、官房長官就任直後に佐々木さんと裏でいろいろ話し合ったことを記憶している。帰国した佐々木さんは、官邸を訪れて、田中首相を北京に招待するという周首相のメッセージを届けてくれた。復交三原則のうちの台湾に対する対応と日米安保と正常化の関係について、大平さんは公明党の竹入（義勝）委員長に、中国側の真意の打診を依頼した。竹入さんは、北京で三回も周首相と会談して、その結果を詳細に報告してくれた。中国側から示された案は意外なほど柔軟で、田中さんも大平さんも「これならいける」と自信を強めた。

これらを踏まえて、八月十五日、帝国ホテルで、来日中の中国側代表、孫平化さん、肖向前さんと田中・大平との会談が行われ、私も出席した。席上中国側は、周首相から「田中首相を喜んで中国にお迎えしたい」との連絡があったと述べ、これに対して田中首相は、「周首相との会談が実り多いものになることを希望する」と答えた。これが周首相の訪中招請に対する田中首相の正式の受諾だった。

大平外相は、北京との交渉を進めながら、片方の目ではアメリカ政府の動向を睨んでいた。九月一日と二日にハワイで、ニクソン大統領、ロジャー・ス國務長官と田中・大平の日米首脳会談が行われ、日本側から、対中政策の変更に関する考え方が縷々説明された。アメリカ側は、必ずしも日本の対中接近を全面的に歓迎したわけではなかったように思われる。しかし、日本側は、アメリカが積極的な反対を示さなかったことで一応の満足とし、北京への歩を進めることとした。

「こんなことばかり押しつけやがって」

最も困難だったのは、言つまでもなく、自民党内親台派の説得と台湾政府そのものへの対処である。

七月も末のころになると、さすがに自民党のなかにも日中国交正常化への取り組みを強めなければならぬとの動きが出はじめ、それまでの日中問題調査会を改組して、小坂善太郎元外相を会長とする日中国交正常化協議会が設置された。七月二十四日に開かれたその初会合には、田中さんが出席して、正常化に尽くす決意を述べたが、案の定、過半数に迫る親台派は、結束して猛烈な突き上げをはじめた。その矢面に立たされた大平さんは、会議のたびに呼び出され、ありとあらゆる難癖をつきつけられた。私はその場に同席したわけではなかったが、首相官邸にも、大平吊るし上げの様子がまざまざと伝わってきて、ご苦労されているなど感じた。

結局、この協議会は、「中華民國（台湾）との従来の関係が継続されるよう配慮すべきである」との条件つきで、田中首相が訪中することは認められたが、その目的は、「国交正常化の基本問題について双方が隔意のない意見の交換をする」ためと限定され、党としての基本方針を十分まとめるにはいたらなかった。田中訪中に先立って、小坂協議会会長を团长とする議員団が訪中し、政府間交渉の地ならしをすることになったが、大平さんは、この議員団がさしたる役割を果たしえないことを察しており、日本政府の真意を伝えるためには、別の手段をとられたようだった。

いずれにせよ最大の難関は台湾問題だった。その台湾自体に説明に出かけることについては、椎名（悦三郎）副総裁にお願いした。しかし、椎名さんはなかなか引き受けられない。私も何度か足を運んだが、日韓問題のときにも損な役をさせられた椎名さんは、「おれにはこんなことばかり押しつけやがって」とお冠のようだった。それでも渋々出かけられた椎名さんは、蒋介石総統にも会えず、路上で卵をぶつけ

れるなど、散々な目にあつて帰つてこられた。こればかりは、いまでもお気の毒なことをしたと思つてゐる。党から完全なフリー・ハンドをもらつたわけではなく、右翼からの脅迫電話（田中さんや大平さんとのころだけではなく、私のところにも、「一週間後にはお前の命はないぞ」などという電話がかかつてきた）など、気がかりなことも多かつたが、すでに、出発予定の九月下旬が迫つていた。田中さんは「この機を逃せば、正常化のチャンスは失われる。何としても成功させなければならぬ」と、いつその決意を固くしたようだった。

決死の覚悟できた田中さん

昭和四十七年九月二十五日午前十一時半、田中首相、大平外相、そして二階堂官房長官ら日本政府代表は北京空港に到着した。

その午後の首脳会談で、周恩来首相は、「半世紀にわたる日本軍国主義の中国侵略」を具体的に次々と並べて、「わが方はこれだけの犠牲をこらむっています」と激しい言葉で会談の口火を切つた。これはえらい剣幕だなと思つてゐると、田中さんはこれに動じず、「私は今回ここへくるには、決死の覚悟できました。日中国交回復については、国内の一部に強い反対があります。私たちもいつ殺されるかわかりません。党内にもいろんな議論があります。また、日本はワンマン政治の国ではないから、選挙をやらんくちやなりません。衆議院選挙もあるし、総裁選挙もあります。あなたの国には選挙もないでしょう。総裁選挙もないでしょう」とやりだした。

周さんは横にいた通訳を指さして、「お国のほうにも事情があることはわかりますが、私の国でも、こういう若い人びとのあいだには、日中国交正常化に反対する者もいるんです。決してみんながみんな賛成というわけではありません」と言った。中国は、当時文化大革命のさなかにあつて、周さんすら全面的な

支持を得ているわけではなかったのだ。私はこういう外交交渉の場に出た経験がなかったから、えらいことになった。いったいどうなるかな」と思っていたが、最後に、「小異を残して大同につき、合意に達することは可能である」という結論に到達した。

官房長官はスポークスマンであり、できるだけ正確に物事を伝えなければならないが、余分なことを言っても、言い足りなくても、無用の誤解を招いてしまう。そこで、私が説明すべきことは、外務省の橋本（恕）課長（現中国大使）がメモにして渡してくれることになっていた。これ以上しゃべっちゃダメですよ」というわけである。だが、私が最初の首脳会談後の記者会見の冒頭で「驚くほど率直な意見の交換がありました」と説明した言葉は、私の率直な感じであって、そのメモには書いてなかった。

最初の日の夜の会談で、田中さんは、これまでの日本の行為について、「長いあいだ大変ご迷惑をかけた」と謝罪の気持ちを表明した。だが、そのあとの首脳会談でこの言葉がまた問題になった。周首相は、「『ご迷惑をかけました』というのは、女性のスカートに水をかけてしまったときに謝る言葉です。これまでのことが、『迷惑をかけた』ですみますか」と言いだした。田中さんはこれに対して、「中国ではどういうか知らないが、日本ではそういう表現をもってすべてを尽くしているんです」とがんばった。会談には予想していなかったことが次々と出てきて、しょっちゅう意見が対立した。ときには、双方が色をなすというようなこともあった。

大平さんが姫鵬飛外相とのあいだの交渉でいちばん苦勞したのは、やはり台湾問題をどう処理するかという点と、中国への謝罪の意をどう表現するかということだった。中国は名を重んじる国だから、日華条約が不法かつ無効であるという立場を貫こうとした。日本は、正常化後も台湾との実質的な関係がたもたれることに重点を置いていた。結局、日華条約は正常化の調印後に、日本が自ら破棄を声明することで話し合いがついたが、謝罪の文章の決着は、調印の日の未明までかかった。

「ちよつとトイレを貸して下さい」

毛主席はおそらくこうした双方間のやりあいについて逐一報告を受けていたのだろう。三日目の九月十七日の夕食中に、「毛主席が会いたいと言っているから、すぐ支度をしてほしい」という連絡があつて、田中・大平・二階堂の三人だけが呼ばれた。どういふわけかそれぞれ別の車に乗れという。中南海の門をくぐってしばらく行くと、古い木造の建物があり、車はそこで止まった。それが毛主席の事務所だった。

毛さんは玄關のところに立つてわれわれを待っていた。みんながそこで「やあやあ」と挨拶をして握手したが、田中さんは開口一番、「ちよつとトイレを貸して下さい」と言つて、なかに案内してもらつた。田中さんが出てくるまで、毛さんも待つていた。

それから連れて行かれたのは、書類が一杯詰まつて、引き出しがたくさんある部屋だった。そこには周さんと廖さんがいた。握手を交わすとすぐ、毛さんは周さんを指さして、「田中さん、うちのこれともうケンカはすみましたか。ケンカしなくちゃだめですよ」と言つた。私は、「えらいことを言つもんだなあ」と思った。それ以外の話としては、子供の時代に親からえらい厳しい教育を受けたことや、親孝行が必要であるということなどで、込み入つた政治向きの話はなかつた。

毛さんはまた、廖承志さんについて、「この人を連れてかえつて、あなたの国の参議院から立候補させてください。そうすれば当選するでしょう」と冗談を言つた。田中さんは「廖承志さんは日本のことに詳しい。早稲田のあたりのそば屋から飲み屋まで全部知っていますよ」などと応酬していた。

会談は、ほとんど毛さんの独演で、一時間足らずで終わった。帰りの車のなかで、あの会談はいつたい何のためだったのかと考えたが、結局、「迷惑」論議にはじまつた問題を氷解させ、感情的なしこりをなくして、このとき交渉を終わらせるといふ意味の手打ち式だったな、と思ひ当たつた。

帰りがけに、「これからは詩でも勉強しなさい」という意味か、毛さんは中国の古い詩集をくれて、最後にひとこと「田中さん、私も神経痛で、足が弱っています。近く天に召されますよ」とつぶやいた。会談のあと私たちが毛主席と会ってきたことがわかっていたので、私だけ記者会見に臨んだ。このときは、外務省から誰もついてこなかった。メモを書いて渡してくれる人もいなかった。私は自分の判断で、この毛さんの別れ際の言葉だけは公表から省いた。もしそれを話せば、「毛沢東はもう長いことない」というニュースがただちに世界に広がるかもしれないと恐れたからである。

この中南海の毛主席との会談後、首脳会談はスムーズに進み、日中国交正常化は滞りなく成立した。この長い厳しい会談のなかで、印象に残っていることは二つ。一つは、台湾について周さんが「台湾とは、経済交流、文化交流、人の交流を自由にやってください。台湾に武力行使することは絶対にありません」と言ってくれたこと、もう一つは、田中さんが会談の最後に、「尖閣列島の共同開発をやりましょう」と言ったところ、周さんが「田中さん、その話はあとにしましょう」とハッキリ言い、田中さんがそれ以上突っ込まなかったということである。

「二階堂さん、寝かしておきなさい」

九月二十九日、午前十時に共同声明の調印が行われるという日の早朝、大平さんが朝方まで姫鷗飛外相と共同声明の文案の詰めで夜なべしたため、赤い目をして田中さんの部屋へやってきた。田中さんと大平さんは、「よかった。苦勞のしがいがあったな」と互いに勞をねぎらい合ったあと、宿舎の備え付けの用紙に筆で自作の詩をしたためた。大平さんの詩の文句は次のとおりである。

長城延々六千里

汲尽蒼生苦汁泉

始皇堅信城內泰

不知抵抗在民心

山容城壁默不語

榮枯盛衰凡如夢

大平さんはいつたいこの詩をいつつくったのだろう。またその内容は何を意味しているのだろう。私にはそれがわからなかった。いつかはわかることもあるかもしれないと考えて、この詩が記された紙をつい先日まで手元に大切に保管していたが、先日、わからぬままに大平さんのご子息にお返しした。

また、あのときには、田中さんも何かもつと短い詩を書いたはずで、それも私が保管していたように思う。だが、どういうわけか、どこを探しても見つからない。私にとって、これは日中国交正常化にまつわる二つの謎として残っている。

調印の祝福の乾杯のあと、田中、大平、二階堂は上海への特別機に乗り、周首相と四人は特設席についた。ところが田中首相はまもなく寝てしまった。強いマオタイ酒によっぱらったためだろう。目のさめない田中首相をおこしましよと言ったら、周首相は、「二階堂さん、寝かしておきなさい」と言われたのでそのままにしておいたら、田中さんはちょうど上海の近くでやっと目をさました。

振り返ってみると、日中友好親善の井戸の満々と溢れる水面には、それを穿った人びとの影が延々と連なって映っている。私は、二十年前、その井戸を掘る作業のほんの少しを手伝ったにすぎない。だが、私

が確信をもって言えるのは、もしあのときの毛さん、周さん、田中さん、大平さんの決断と苦労がなかったら、いま日中の友好も、太平洋の平和もなかったらうということである。

(衆議院議員・田中内閣官房長官)

『正論』一九九二年十月号より転載